

ウエス力地方における城塞と定住（一〇八三年―一二三四年）

足 立 孝

一 序論*

かつて中世ヨーロッパ農村史研究に定住史という新たな視角を導入したガブリエル・フルニエは、地中海沿岸部諸地域における城塞と定住形態の關係のあり方をめぐって、みずからが先駆となつた一九七〇年代以降の多産な研究成果をもとにおおよそ次のように総括している。⁽¹⁾ イタリア中部ラティウム地方を対象として、ピエール・トゥベールによつて抽出されたいわゆるインカステラメント・モデル（領主主導で推進された城塞を核とする高地防備集落の形成）⁽²⁾は、これを参照軸とした数多くの研究成果を生み出す契機となる一方で、しだいに研究対象となつた地域ごとの偏差をうきばりにするという副産物をももたらした。もともとそれは、ピレネー山脈の北と南というように大きく区分することができるといふ。すなわち、イタリアやフランス南部のように、人口密度が比較的高い従来の定住領域で創出された城塞集落では、中核をなす城塞が在地支配を中心とした経済的・領主制的な機能に重点がおかれているのに対して、イスラームと対峙するスペイ

ン北部のように、定住密度が低くマージナルな土地の占有によつて創出された城塞集落の場合は、どちらかといえば軍事的・戦略的な機能が勝っているため、定住形態と空間組織におよぼす役割もおおのずと異なるというのである。

実際、ピレネー山脈以北のインカステラメント現象における地域ごとの偏差は、イニシアティブ（領主主導が農民の自発性が）、成熟度（密集度や高地化の度合いなど）、形成過程（急激な形成か、数世紀にわたる緩やかな形成か）といったいわば程度の差異に収斂するものとみなされていて⁽³⁾、城塞が在地支配の拡充過程において果たしたきわめて重要な役割はいささかも疑われていない。これに対してスペイン北部の城塞は、イスラームと対峙する辺境地帯に集中していて、空間全体の組織原理となっていないケースもしばしばであり、そればかりか、一つの城塞に一つの集落が対応する緊縮した支配と経営のユニットが形成されなかつたり、空間的・社会的な流動性がきわめて高く、突出した城主権力が生成しづらかつたため、城塞さえもが不在の防備集落ばかりが王権の

入植許可状を介して形成されたりと、城塞そのものが封建化の過程で果たした役割はきわめて低く見積もられる傾向がある。とくにスペイン北西部の専門家たちはインカステラメント現象の不在をはつきりと指摘しており、⁽⁴⁾いわゆるシャテルニー（城主支配圏）論も、それを地誌的に肉付けするインカステラメント論もあり隆盛をみることなく、それが結果としてフランス学界とスペイン学界の封建制の形成過程に対する理解の差異につながっている部分があるのも否めないのである。

翻つて、わたしたちが以下で検討を試みるピレネー山脈北東部のアラゴン地方は、以上のような理解のもとではどのあたりに位置しているだろうか。一九九〇年代以来、同地方の封建化のありようを精力的に明らかにしてきたカルロス・ラリエーナ・コルベラは、当初からフランス学界寄りの立場を鮮明にうちだしながら、シャテルニーの空間的・地誌的編成と、その封建的な領有形態に焦点を当てている。もともとアラゴンの城塞は、ナバーラ国王サンチョ三世（在位一〇〇四年―一〇三五年）が統治した紀元千年ごろから一貫して、イスラームとの辺境地帯に相当するピレネー山脈の南斜面に集中していたから、シャテルニーが空間編成の核をなすようになるのは、大幅に遅れて一〇八〇年代以降、イスラーム・アラゴンの征服が本格化してからのこととなる。こうしてアラゴンの封建化は、二つの断絶をともないながら進行することとなる。すなわち、従来の支配領域であつたピレネー山とともに、イスラーム統治下のそれともやはり異なる、城塞を中心とした集住村落の形成と、新たな空間の編成様式の生成である。それはちょうど、アンダルス上辺境領最北部の重要都市ウエスカの

征服（一〇九六年）が達成された国王ペドロ一世（在位一〇九四年―一一〇四年）の治世に相当し、この時代には、城塞の増加と、城主の在地化・世襲化が進行し、彼のことは借りれば、「封建国家」の成立をみることになるのである。⁽⁵⁾こうした理解をネオ・マルクス主義的と断ずるクレイ・ストールズにしてみても、この時代に城主の在地化・世襲化という傾向が少なからずみられたという認識は共有されている。⁽⁶⁾

だが、アラゴンの封建化のリズムをカタルーニャやピレネー山脈以北と連動させようとするあまり、ラリエーナの議論はもっぱら政治権力構造の変動に集中せざるをえなくなっている。たしかに、城塞を中心とする比較的緊縮したユニットに空間が分節化され、それに対応した封建的な権力分与の体系は成立したかもしれない。けれども、そこはあくまでも征服領域であり、防衛上の配慮からも、城主の経済的収入という観点からも、入植者の誘致が急務となる。こうして、安定的なヒエラルキーと強権的な在地支配の発達をむしる阻害する人的・社会的な流動性までもがともに増幅することになってしまふ。そうした場所では、入植者はかなり軽微な定率貢租や教会十分の一税を負担するのみで、法的にもさまざまな特権を享受できたため、同時代のピレネー山脈以北とはまるで異なる存在形態を示すことになる。だから彼がピレネー山脈以北と同じような封建的な諸要素を抽出しようとするればするほど、その議論は政治権力構造におのずと限定されることになってしまうのである。

これは封建化の遅滞、あるいはしよせん封建制の未熟なヴァリアントにすぎないのだろうか。城塞集落の機能をめぐるフルニエ

の所説にも、ピレネー山脈以南に対するそうした認識が隠されていないだろうか。事実、一昔前のスペイン学界では、まさしくそれが、西欧なみの封建制が発達をみなかつたことの根拠とみなされて、ある種のコンプレックスをみずからに強いることになっていたのである。⁷⁾けれどもここでは、従来とはまったく逆の作業を試みたい。安定的かつ強権的な在地支配の生成を予感させる比較的緊縮した支配と経営のユニットへの空間的分節化と、空間的・社会的「移動」というモメントが期を同じくしてはつきりと表出する場所をあえてモデルにすることによって、後者を前者の攪乱要因とみなして単純に切り捨ててしまうのではなく、むしろ後者が前者に対していかなる機能を果たしていたかを問うのである。ここから、いち早く安定的な成層社会の形成をみたとされる地域を逆に照射してみること、封建制が本来、外向きであれ、内向きであれ、征服、入植、開墾による広い意味での「拡大」と、それにとまなう空間的・社会的流動性というある種の不安定性をつねに内包していなくてはそもそも安定的でありえない、そうしたきわめて特殊なシステムであることを再認識することになるはずである。

二 城塞とホノール

わたしたちが以下で検討するのは、アングルス上辺境領(El Tagir al-A'la)の最北の都市ウエスカを中心とする地域であり、征服後はちょうどウエスカ司教管区として編成される領域である。⁸⁾そのおおよその範囲は、ほぼ西のガリエゴ川から東のアルカナードレ川までの領域に相当すると考えてよい(地図)。一〇六九年

にはバルバストロ北方に所在するムスリム城塞拠点アルケーサル(9)の征服、一〇七六年には西のナバーラ王国の併合といったように、一一世紀後半のアラゴン王国の政治的・経済的發展はめざましいものがあつたが、眼前にひかえる最大のライヴァル、サラゴサのタイファ国王フード家が統べるウエスカに対しては、本格的な征服活動は遅々として進んでいなかった。だが一〇八三年、ウエスカ北西の城塞拠点アイエルベが満を持して征服され、同地方征服の道がようやく開かれることになる。

同年、アイエルベ領域の国王貢租(九分の一の定率貢租)ならびに裁判収入の四分の一がサン・ファン・デ・ラ・ペーニャ修道院に寄進されたとき、ウエスカの周辺に所在する一二のムスリム村落がアラゴン国王サンチョ・ラミレス(在位一〇六四年―一〇九四年)に対して「貢租(alnudegana)」を負担しており、この地域一帯に対するアラゴン王権のヘゲモニーがすでに強化されつつあつたことをものがたっている。¹⁰⁾一〇八六年から翌年にかけては、ウエスカ近傍の残丘の頂上に堅牢なモンテアラゴン城が建設され、¹¹⁾ウエスカ征服への準備が着々と整えられている。また、ムスリムの人口密度が低かつた同地域の西部では、ガリーサの塔の建設(一〇八四年)、¹²⁾アルタソーナ城の建設(一〇八七年)、¹³⁾トルモスならびにビオータの塔の再建(一〇九一年)¹⁴⁾といったように、比較的スムーズに地歩が確保されている。もつとも征服自体はさらにのちの一〇九六年のことであり、途中、ウエスカ都市領域のアルコラスの戦いで国王サンチョ・ラミレスが命を落とすものの(一〇九四年)、¹⁵⁾あとを継いだペドロ一世の指揮下でついにのどから手が出るほど欲しかった平野の都市拠点ウエスカを自

軍の足下にひれ伏せるのに成功したのである。

アンダルス上辺境領のなかでもキリスト教徒の支配領域に最も近接したこの地域は、アンダルスのなかで城塞が最も数多く分布する地域でもあり、ウエスガ征服後も幾つかの城塞拠点には依然として抵抗を続けている。⁹⁷⁾ 他方、掌握された城塞拠点は教会や修道院に寄進されたものを除けばほぼ例外なく、ナバラ王国王サンチョ三世以来のナバラ・アラゴン伝統の城塞管理システムに統合されてゆくことになる。一般にホノール(honor)・システムと呼ばれているのがそれである。一一世紀初頭、同国王は、防衛上の配慮からピレネー山脈の南斜面に複数の城塞拠点を配し、西から東にのびる前線地帯を形成した。このときそれらの城塞は、バロン(baron)、また通例はより一般的な呼称でセニョール(senior)と呼ばれる国王側近の大貴族⁹⁸⁾の手にホノールとして委ねられ、それらの軍事的・経済的な管理が一任されたのであった。⁹⁹⁾ その後、アラゴン王国の分離・独立(一〇三五年)、リバゴルサ伯領の併合(一〇五〇年代)、ナバラ王国の併合(一〇七六年)を経て、ウエスガ地方への進出が本格化するまでに、ナバラで二三¹⁰⁰⁾、アラゴンで三五¹⁰¹⁾、リバゴルサで一一¹⁰²⁾の城塞拠点が、ナバラ王国に端を発するこのシステムによって大貴族の掌中でそれぞれ保有されたことが知られている。

もともと城塞保有者の世襲化・在地化がもたらす帰結をおそれてか、アラゴン王権はこれらを大きく分けて二つの方法で掌握した。ひとつには、王族、または王権にきわめて近いナバラ王国以来の少数の大貴族家系に、あちこちに散在する複数の重要拠点を世襲的に委ねて管理させ、いまひとつには、都市や征服し

たての城塞拠点には血縁関係のない複数のバロンを配したり、彼らを数年周期ですげかえたりするというものである。こうした方法は一一世紀後半になっても依然として本質的な変化を被っておらず、アラゴン王権の例外的な強固さをものがたるものとして長らく認識されてきた。ただじつをいうと、このシステムの実態はアイエルベが征服される一〇八三年あたりまで闇に包まれたままであった。カタルーニャのように、特別な文書形式を用いて城塞保有を契約化し、双方の権利や義務が明記されるようなケースはおよそみあたらない。¹⁰⁴⁾ 彼らがある城塞拠点を保有していることは、国王証書の年代記載部分に列挙された人名リストからうかがわれるにすぎない。¹⁰⁵⁾ それゆえ彼らがいかなる義務を履行し、いかなる権利を確保していたかは、正確にはほとんど知られていないのである。

もともとウエスガ地方の征服過程で、少しずつ彼らの義務と権利の内容がこいまみえるようになってくる。彼らバロンは、国王の助言者にして、国王法廷の主要な構成メンバーでもあり、みずからが保有するホノールの近隣で生じた紛争に際しては国王の命令を受けて独自の法廷を主宰することもあったし、¹⁰⁶⁾ 新たに征服された城塞の帰属領域を画定する必要が生じた場合には、国王の命令を受けた複数のバロンがみずから実地検分を行ったりする¹⁰⁷⁾ こともあれば、国王に対する奉仕の恩賞として土地が分与される者に対しては、これを国王にかわって履行する¹⁰⁸⁾ といったケースもしばしばみられた。さらに一一三四年にアラゴン貴族が起草し、当時サラゴサに駐留していたカステイリャ・レオン国王アルフォンソ七世の承認を得て発給された、「国王ベドロ一世治世の

慣習法文書」と俗に呼ばれる史料では、ホノールを保有する彼らバロンが年間三ヶ月間の軍事奉仕を供出する義務があったことが明記されている。²⁸ 他方、アイエルベ征服後に発給された国王証書は同地の国王諸権利を寄進するとしたサン・ファン・デ・ラ・ペーニャ修道院への寄進状であるが、一般に文書を介せずに任命される²⁹ 彼らバロンが城塞とその付属領域でいかなる権利を賦与されていたかをさいわいにもかいまみせてくれている。すなわち、彼らは、アイエルベ全領域の九分の一の定率貢租収入の二分の一、前述の一二のムスリム村落から徴収される「貢租」の二分の一、そして裁判収入の二分の一を城塞の保有と維持の見返りに確保しているのである。³¹

アイエルベ征服前後から、以上のようなホノール・システムに新たな要素がしだいに流入しつつあったのをみてとることができ、この地域の征服が一二世紀初頭までにおおよそ完了すると、このシステムに統合される拠点は大幅に増加することになった。ナバーラからリバゴルサまでで六九ヶ所を数えたホノール拠点が、ガリエゴ川からアルカナードレ川までの比較的狭隘な空間だけでなくと四〇拠点を加えることになるのである。³² こうなってくると、従来のバロン家系に属さない人びとが、征服活動に参与して功をなしたり、国王に重用されたりすることで、新たに征服された城塞拠点の保有者として続々と加わってくることになる。たとえば、国王ペドロ一世治世の最有力貴族オルティ・オルティスは恰好の事例である。彼はそれまでのバロン家系に根をもつ人物ではないにもかかわらず、この地域だけでも一〇九六年から一一〇五年までに、ウエスカ、モンテアラゴン（いずれも複数のバロン

による共同管理）、ラバータ、ピラセス、サンタ・エウアリアの保有者として登場する。³³

また興味深いケースとして、フォルトゥン・ガルセス・デ・ピエル（ウエスカ、ピエル、プエージョ・デ・ハカ、プイボレア、サルビセ、テナ）³⁴、サンチヨ・ガルセス・デ・セラスバス（アルカラならびにファニヤナス）、フォルトゥン・ガルセス・デ・バリエ（プエージョ・デ・ファニヤナス、アルガビエソ、ノバレス、サバイエス、ウソン）、サンチヨ・イニゲス・デ・オルナ（オルナ、クルベ、グラニエン）といった人びとを挙げることができる。彼らは自分の出身地、あるいは本来の王国の故地ピレネー山脈で賦与されていたホノール地名を、新たに保有することになったウエスカ地方のホノール地名の前につねに冠しており、このことが、彼らがそうした土地の有力な新興領主家系の出身者であったことをものがたっている。もっとも新たな土地にひとたび定着すると、次の世代にはその土地こそが自分の出身地と認識されたのである。人名に冠せられる地名が賦与されたホノール地名に次々に変化してゆくケースもみられる。たとえば、サンチヨ・ガルセス・デ・セラスバスの息子で、一一一九年にエプロ川南方のベルチーテを賦与されるガリンド・サンチエスは、セラスバスではなく父親が保有したアルカラの地名を冠しており、さらにガリンドの弟ロペ・サンチエスは、兄が賦与されたベルチーテの地名を自ら冠するようになってゆくのである。³⁵ このあたりからは、賦与されるホノールに急速に定着し、家族の故地をそこに移しかえながら、も、そつかといってそこに完全に腰を落着けるのではなく、王国の征服活動の伸展に合わせてみずから根を張る土地を次々に移

しかえてゆく、家系と地所に対する一種独特の意識がみてとれる。³⁹⁾

こうした新興の貴族家系による同一ホノールの世襲という傾向は、依然として保有者の高い流動性(周期的な交代、複数のバロンによる同時保有、一人のバロンが保有する複数のホノールを一地域に集中させない)という伝統的な傾向をはらみながらも、ペドロ一世の治世からアルフォンソ一世の治世にかけてますます顕著になっていった。前述のオルティ・オルティスから息子フェリス、³⁷⁾フアン・ガリンデスから息子サンチョ・フアネス、ペラ・ペティから息子ペドロ³⁸⁾といったように、この地域の複数の城塞拠点が親から息子へと継承されてゆくのが確認される。またアルベロ・アルトおよびアルベロ・バホの保有者家族については、フォルトゥン・サンチェス・デ・ラサオーサ(アラ、バイロ、オルソン、ペーニャのバロン)の寡婦ロバが、一〇九七年から一〇三年までアルベロ・バホ、すこしとんで一三六年にはアルベロ・アルトの保有者として国王証書に名を連ねており、⁴⁰⁾その息子ロペ・フォルトゥニョーネス・デ・アルベロはアルベロの地名を掲げながら、双方のホノール以外にも、オルタ・ダ・トゥルトーザ、ロアーレ、ペーニャ、ペルトウーサ、⁴¹⁾ボーラ、シエソ、トレシウダーを掌握し、同地域南部一帯を中心に強力な影響力を誇るようになってゆくのである。

夢なかばで死没した国王ペドロ一世のあとを継ぎ、サラゴースを筆頭にエブロ川一帯からアラゴンまでを驚異的なスピードで征服したアルフォンソ一世(在位一一〇四年―一三四年)の治世は、そうした傾向とは一線を画するものとしてしばしば理解さ

れている。わけてもピレネー山脈以北の貴族を重用する姿勢は、十字軍思想への傾倒を前面におしだしたこととならんでその最ものもとの認識されてきた。けれどもクレイ・ストールズは、国王のそうした姿勢を従来とは異なるやり方で説明しようとしている。すなわち、ペルシュ伯ルトウル、ベアルン副伯ガストン、その実弟にしてピゴール伯サンテュルといったフランス人貴族の重用は、十字軍思想の流入とか、先進的な軍事技術の導入といった意図とはあまり関係がなく、むしろそれは、前述のとおりアラゴン貴族の社会的上昇と国王ホノールの世襲化・在地化という緩やかに進行しつつあった事態と密接な関係があるという。それとというのも、彼らフランス人貴族はもともアラゴン王国に根を張る大土地所有者でもないから、サラゴースやトゥデラといったエブロ川流域の最重要拠点を任せたからといって、その土地に持続的なヘゲモニーをうちたてられるとはかぎらないし、なによりも彼らはアルフォンソと姻戚関係にあったから、その意味ではむしろ、新興のアラゴン貴族による世襲化・在地化の進むホノール・システムを、複数の重要拠点を王族に集中させたかつてのそれへと回帰させようとするものであったと主張するのである。⁴³⁾

ただ、だからといって、世襲化・在地化といった傾向が王権そのものの根幹をゆるがすような事態にならなかったことも付け加えておかななくてはならない。たとえば、前述のサンチョ・ガルセス・デ・セラスバスは、一〇九七年からファニャナスならびにアルカラを保有しているが、ファニャナスは同年に、アルカラは一二世紀初頭にいずれも国王によってウエスカ司教に寄進されている。⁴⁴⁾単純に考えれば、これらの寄進によって、サンチョ・ガル

セスの家族は国王ではなくウエスカ司教に対して誠実を誓うことになるか、あるいは国王によって代替地を賦与され、これらの城塞から別の城塞へと移転することになったはずである。⁽⁴⁵⁾ところが彼は、一〇九七年以降もファニヤナスのバロンとして一一〇三年まで国王証書に名を連ねているし、アルカラの場合にも、彼の息子ガリンド・サンチェスがアルカラの地名を冠して同城塞との深い関係を一貫して維持していたのである。したがって、城塞の上級領主権が国王から司教に移り、原則として城主が誠実と奉仕を果たすべき相手が司教にかわっても、依然としてその城主が国王のバロンとして認識されていたことになるのである。⁽⁴⁷⁾

アルフォンソ一世がリエイダ近郊のフラガの戦いで戦死し、西のナバーラ王国がかつての王族出身者ガルシア・ラミール⁽⁴⁸⁾を国王に推戴して独立、南方への領域拡張もストップすると、アラゴン貴族はペドロ一世の治世の慣習にあからさまにたちもどろうとすることになる。こうして発給されたのが、前述の「国王ベドロ一世治世の慣習法文書」であった。そこでは、国王ホノールが、三つの大罪（バロンの死亡、妻の姦通、ホノールをもって国王以外のセニョールのもとに追従すること）以外では没収されえず、バロンみずからが保持していた慣習と利益権を確保できること、国王ホノールを他国の者に賦与してはならないことなど、ホノール保有者の権利が確保される一方で、国王ホノールの保有者は国王のみに臣従し、年間三ヶ月の軍事奉仕を果たさなくてはならないとするホノール保有者の義務までもが明記されている。⁽⁴⁹⁾だが、半島内外の強国に囲まれ、もはや領域拡張の道も閉ざされたアルフォンソ亡きあとのアラゴン王国では、あとを継いだ王弟ラミール

ロ二世（在位一一三四年―一一三八年）が聖俗貴族の誠実を確保する際に、もはや国王ホノールを新たに賦与することはできなかったであろう、すでに国王ホノールに在地化していたバロンにホノールそのものの自有地化を追認するという措置をとるほかはなくなっていたようである。たとえば、一一二八年から一一三四年にわたってアングエスの保有者であったペドロ・オルティス・デ・リサーナは、一一二八年に当該ホノールを保有する際に、家屋建設と入植推進を条件として領域内のアルムニア（後述）の一部を自有地として分与され、その後、アルムニア全体を獲得、そして一一三四年にはヴィラ全体がその領域とともに彼の自有地と化している。⁽⁵⁰⁾ペドロ一世の治世から、アルフォンソ一世の治世を経て、ラミール二世の治世にいたるまで、約五〇年という歳月をかけて、アラゴン貴族による城塞の世襲化と在地化は、紆余曲折を経ながらきわめて緩やかに、しかし着実に進行していったことになる。だがそれが、暴力に満ちた社会的危機をほとんど表面化させることのないまま、安定的に達成されたのは、まさしく高い空間的・社会的流動性を内在させた政治空間の急激な拡張の渦中であつたことはみずこされてはならないのである。

三 征服・入植と城塞集落の形成

前述のとおり、征服されたムスリムの城塞や村落は総じて国王ホノールとして編成され、バロンの掌中に委ねられた。ムスリムの人口密度が低かったウエスカ地方西部では、ウエスカ征服以前から幾つかの城塞や塔が俗人貴族の自有地となっていたが、⁽⁵¹⁾こうしたケースはムスリムの定住地が密集するウエスカ周辺ではむ

しる例外的である。事実、ウエスカ地方の四〇のホノールは、ほぼすべてがかつてのムスリムの城塞や防備集落の所在地に形成されている。征服直後の段階で、ムスリムの城塞や集落が全体として賦与されたケースは、ベリーリヤス、セサおよびタベルナス、そして前述のアルカラならびにファニヤナス⁶⁴くらいであり、俗人貴族の自有地として賦与される例はいっさいみられない。アラビア語史料に登場するムスリムの「城塞」(hisn)は、アイエルベ、ボレア、セン・イ・メン、ラバータ、ピラセス、ガバルダ、アンティリョン、ノバレスの八ヶ所であるが、このうちキリスト教徒によって再占有されずに廃絶したガバルダを除いてみな国王ホノールとして編成されている。これら以外ではラテン語史料に登場するカストルム(castrum)、カステッルム(castellum)、塔(turre)、囲壁(murus)といったことばを追跡してゆく以外ないのだが、イスラーム統治下で建設されたものか、征服後にキリスト教徒によって建設されたものかをさしあたり度外視すれば、アルカラ、ファニヤナス、クルベ、カリエン、サンガレン、ピシエン、サリニエーナ、シエソ、アルタソーナ(以上カストルム)、アルペロ・バホ、サリニエーナ、ペラルタ・デ・アルコフェア(以上カステッルム)、ウソン(塔)、ボレア、アルムニエンテ(囲壁)といったものが挙げられる。またこのほかに、文字史料からはうかがい知ることのできないものの、大部分の集落が岩塊の頂上に塔、貯水槽、穀物貯蔵庫、ときには囲壁を備え、その下方に定住区を擁するといったように、多少なりとも防備の施された集落形態を示していたことを、近年の考古学的研究が教えてくれている⁶⁵。

だが、城塞にしろ、塔にしろ、防備集落にしろ、アラゴン人はムスリムのそれを再占有し、それをそのまま継承したわけではない。たしかに、この地域はアンダルスのほかの地域にもましてムスリムの城塞や防備建築が数多く分布したところではあるが、現在までその姿をとどめているものの多くはむしろ征服後に建設されたものであり、イスラームとの辺境がはるか南方に移動して、かつてほどの軍事的・戦略的投資が不要になってから形成されたものが大半を占めているのである。フィリップ・セナックは次のように指摘している。すなわち、ムスリム城塞や防備集落は総じて、大規模な岩塊上に貯水槽、貯蔵庫を擁し、ときには塔や囲壁などの防備建築を備えていて、その斜面からふもとかけて定住区が展開しているのが通例である。出土する遺物の性質は上方と下方で大きく異なる場合もあるのだが、概してムスリムの城塞は下方の住人の避難所としての機能を果たすものにすぎなかった。そうしたいわば共同体的な性格にねざした城塞集落は、封建化の伸展しつつあった社会に生きる征服者たちにはとうてい適合すべくもないものであったから、それらが単純に再占有されることはむしろまれで、その近傍に新たな城塞集落が征服者によって形成されるのが一般的な傾向であったというのである⁶⁶。ここで暗に示唆されているのは、同地域の城塞が、冒頭で紹介したフルニエの所説のように軍事的・戦略的な機能に重点をおいたものではなく、むしろシャテルニエの領主制的な一元的支配の装置として征服後に系統的に創出されたということである。だが、その道のりはどうやらきわめて険しいものであったようである。

ウエスカ地方全域が征服される直前に、国王との契約を介して

建設されたガリーサの塔やアルタソーナ、また廃絶した塔遺構を再占有し形成されたトルモスは、入植事業の推進によるカストルムならびにヴィラの創出を条件に、いずれも国王バロンに自有地として賦与されている。ところが、ガリーサの塔はその後の経緯はいっさい知られていないし、アルタソーナならびにトルモスは、ヴィラとカストルムということばがみられることからいちおうの努力の形跡はみられるものの、入植は遅々として進まなかったようであり、いずれも自有地としてバロンに賦与されたにもかかわらず、どうやら廃絶してしまつて王領地に復帰し、前者はアルフォンソ一世治世の一三〇年ならびに一三四年に⁶⁷⁾、後者は一三二七年に⁶⁸⁾、それぞれ解放特許状の発給を梃子にふたたび入植民の誘致が企てられている。このうちアルタソーナのみが国王ホノールとして再編成され、すでに一二六年からペラ・ロメウなる保有者がいたのだが、それ以降も依然として入植が進んでいなかった実態がここにみてとれる。⁶⁹⁾

大半が国王ホノールとして編成され、またその一部が教会や修道院に寄進されたかつてのムスリム城塞や集落にしてみても、そうした紆余曲折と無縁であつたわけではない。ホノール賦与は一般に文書をともしなわれないから、賦与に際しての条件がいかなるものであつたかはほとんど知るところがないが、少なくとも保有者のイニシアティヴで入植が進められるよう望まれたことは想像にかたくない。また、それらが教会に寄進されるような場合には、文書のなかではつきりと入植事業に対する配慮が示されている。たとえば、前述のようにアルカラは一二世紀初頭にウエスリコ教座に寄進されながら、一貫して国王バロンが登場する城塞集落で

あつたが、寄進時には国王の隷属農民(メスキューヌス(mesquinos))に対して同地への入植命令が下っている。⁷⁰⁾ 実際のところ、国王証書にそれらの地名を冠したバロンがすでに出てきているからといって、城塞や集落の内部が入植者で着々と満たされてゆくといった光景を単純に想像しないようにしよう。たとえば、クルベには一〇九七年以来、サンチョ・イニゲス・デ・オルナなるバロンが存在し、一一〇五年ごろの同人の遺言状でも彼が所有する複数の家屋や家畜が登場するが⁷¹⁾、一一三三年に国王留保分と想定される同カストルムの二分の一がモンテアラゴン修道参事会に寄進されたおりには、その従物に放牧地、水流、森林、叢林以外みあたらず、国王もまた、「入植を進め、キリスト教徒全体の名誉のために良き防備建築を建設すること」と命じている。⁷²⁾ そこでは、入植の停滞、もしくは早くも廃村現象のような事態が生じていたことがみてとれるのである。

実際、そうしたバロンたちが、保有するホノール全体の入植をみずから系統的・組織的に推進した形跡はいっさいない。彼らはむしろ、国王とともに遠征をくりかえし、その先方で獲得される戦利品や新たなホノールを集積することや、より南方のエブロ川沿いの重要拠点を確保することに執心し、もともとのホノールを組織的に経営・維持することに気がまわらなかつたのかもしれない。家屋建設、入植促進、城塞集落の建設といった活動はむしろ、当のホノールを保有するバロンではなく、むしろほかのホノールを保有するバロンや、国王への良き奉仕を報いられたバロン以外の人がと(教会や修道院を含む)に対して、国王がその内部のかつてのムスリム財産や家屋建設用地を自有地として賦与する際に

明確にあらわれてくるのである。もしかしたらそれは、当該ホノールの保有者と、その内部で自有地を所有する者とをあえて複雑に錯綜させることによって、当の保有者が在地化しないようにするための国王なりの戦略であったかもしれない。いずれにせよ、入植を企図した文言は、征服よりもはるかに遅れて、ペドロ一世晩年の一一〇四年あたりと、アルフォンソ一世治世も後半にさしかかった一二二〇年代という二つの波をとまっていたとあらわれることになる。

興味深いのは、国王ホノールであれ、教会や修道院に寄進された集落であれ、城塞や防備建築の所在するほとんどの定住地であつてのムスリムの家屋や土地財産が分配されるケースよりも、家屋の建設と入植の推進を条件として一定面積の新たな土地区画が分与されるケースの方が多いという事実である。実際、アイエルベ、⁽⁶³⁾ラバータ、⁽⁶⁴⁾カリエン、⁽⁶⁵⁾ピシエン、⁽⁶⁶⁾サンガレン、⁽⁶⁷⁾アルベロ・パボ、⁽⁶⁸⁾サリニエーナ、⁽⁶⁹⁾プエージョ・デ・ファニャナス、⁽⁷⁰⁾マルセン、⁽⁷¹⁾アルムニエンテ、⁽⁷²⁾アングエス、⁽⁷³⁾クルベでは、イスラム統治下でムスリムの定住地が所在していたながら、それらの再占有はあまり重視されずに、むしろ征服後しばらくたってから城塞そばの一定規模の家屋新設用地が分与され、城塞を中心に密集した新たな定住区の創出が志向されている。セナックが明らかにしたように、従来のムスリム定住地が、塔などの防備建築の有無にかかわらず、岩塊を背後にその下方に形成されていたとすれば、キリスト教徒のそれはむしろ、城塞が立地する同じ高台の頂上やその直近に密集形態の定住地が上から組織的に編成される傾向にあったわけである。ただ、政治権力という観点からいえば、本

来のインカステラメント・モデルよりもはるかに複雑である。ホノールとして城塞を賦与されたバロンが実際にそうした活動に精を出した痕跡はまるでみられない。これにかわって、王権が明らかにそれを目的として家屋建設用地を別のホノール保有者や教会・修道院に分与し、そうした活動を推進している。そこでは、王権、当該ホノール保有者、そして別のホノール保有者や教会・修道院の利害がいりみだれた、じつに錯綜した権力構造を背景として、整然とした密集型の城塞集落が組織的に生み出されようとしていたのである。

もっとも史料にあらわれているのは、そうした新たな城塞集落を創出しようとする意志にすぎない。たとえば一〇八三年に征服されたアイエルベですら、その段階でサン・ファン・デ・ラ・ペーニャ修道院に城塞の立地する丘の一区画が分与され、家屋の新設が要請されてから、おおよそ四〇年のちの一二二三年ごろに入植民の誘致を目的として城塞周囲の土地の開墾特権が賦与され、一二二五年によく城塞集落が一定の形成をみたのである。⁽⁷⁴⁾実際、前述のクルベのように、入植が進まずになかば廃絶してしまった例もある。セサにいたっては、一〇三年にウエスリコ教に寄進されたのち、一一一四年まではアスロールのバロンがこれを保有していたにもかかわらず、入植事業そのものが入植許可状を発給して実際に着手されるのは一二三三年になってからであり、その際にはなりふりかまわず九分の一の定率貢租のみの負担でムスリムをも迎え入れようとしているほどであった。⁽⁷⁵⁾この時期の文字史料と一七・一八世紀の集落プランを対照しながら、幾つかの集落の形成過程を検討したラリエーナ・コルベラとファン・

フェルナンド・ウトリーリヤは、ほとんどの集落が征服からはるかの一世紀後半になって、明らかに系統的・組織的に創出されたと結論しているほどである。⁷⁶⁾

他方、ラテン語史料には、アルムニア(almunia)という耳慣れないことばがしばしば登場する。アラビア語のムンヤ(munya)に由来するこの史料概念は、菜園とか果樹園を意味することばとして現代カステーリヤ語にも継承されているが、バレンシアのウエルタのように地中海沿岸部の大菜園・果樹園地帯ならいざ知らず、わたしたちの地域でこれをそのまま適用するわけにはいかない。アラビア語史料に登場するムンヤは本来、都市近郊の貴族居館を意味したが、ラテン語史料に登場するアルムニアは総じて、都市近郊の灌漑地帯に分布するムスリム貴族や都市役人の固有の所領であり、居館と菜園を中心とした農業経営地で構成されていたと想定されている。⁷⁷⁾

じつをいうと、アルムニアが最も大量に言及されるのは、アルカナードレ川よりも東のバルバストロ近郊や、多くのアラビア語著作家がイベリア半島有数の肥沃地帯と賞賛したシンカ川流域であり、それらはもっぱら肥沃な灌漑地帯に分布していたことが知られている。⁷⁸⁾これらの地域にくらべればずっと言及が少ないものの、ウエスカ地方の場合にも基本的な特徴はあまりかわらなかったように思われる。すなわち、しばしばムスリムの個人名が冠せられていること、⁷⁹⁾ウエスカ近郊に分布していること、⁸⁰⁾ウエスカから多少隔絶していても堰や水車など灌漑施設が展開した場所に所在していること⁸¹⁾から判断して、ムスリムの都市貴族や役人に帰属する灌漑の施された一円的所領であったと考えられるの

である。⁸²⁾ただ、ここで指摘しておかなくてはならないのは、アルムニアにはムスリム居住者やその家屋にかかわる記述が圧倒的に少ないということである。たとえ荒廃していても、農業経営地に家屋がいつさい不在ということはありえないであろうから、定住様式という観点からすれば、せいぜい散居定住が関の山であつたのだらう。

ただ、国王はこうしたアルムニアをそのまま、あるいは分割するなどしてバロンや騎士(caballeros)に賦与していたことが、のちに教会や修道院に寄進される際に作成された文書のなかで語られている。この場合には、それらはキリスト教徒の人名とともに表示され、終身保有という形式をしばしばとっており、事実上の「封地」としてあつかわれていた印象を受ける。⁸³⁾また、アルカラの領域内には「新しいアルムニア(almunia nova)」なるものがあるが、これについては征服後に境界画定がなされて新たに創出された可能性が高い。⁸⁴⁾他方、サリエーナ近傍のものや、モンメサのアルムニアには塔があるが、これらがムスリムによって建設されたものか、キリスト教徒によって建設されたものかは判然としない。もっともこれらのアルムニアには、従物のなかに家屋も耕作地もみあたらず、ましてや人工的な灌漑施設などはみられない。⁸⁵⁾ことによると、入植対象となった荒蕪地を意味するパルディーナ(pardina)とほぼ同じ意味であつかわれていた可能性も否めない。⁸⁶⁾以上の所見を考慮に入れるならば、キリスト教徒が征服直後に知るにいたったムスリムのアルムニア本来のあり方をこえて、アルムニアということばはより一般的に、比較的大ながら組織的な入植と経営の欠如した散居定住地全般を意味す

るようになり、城塞集落としてのカストルムに対置される概念として、またときにはそうした城塞集落の建設が望まれる入植対象地として認識されるようになったと想定されるのである。

こうした散居定住地のなかには、聖俗領主のイニシアティブのもとで開発され、前述のような密集型のカストルム集落の創出が試みられたものもあった。だが、それも簡単な道のりではなかった。なかでも一〇〇年にウエスカ司教に寄進されたアルボレは、堰を備える灌漑施設によって潤された典型的なアルムニアであったが、一二二年の段階で、それまでこれを領有していた同司教座傘下のサン・アドリアン・デ・ササウ修道院が放置していたため入植がまったく進んでおらず、かわりに司教の領主役人ガルシア・サンチェスに賦与されている。⁸⁸⁾その後一二三九年には、同地は城塞(カステルム)を備えたヴィラと表示されているが、あいかわらず荒廃したまま放置されており、入植事業の推進を条件としてロベ・ガルセス・デ・ボラスなる人物と全収入を折半する保有契約がむすばれている。⁸⁹⁾同人はその後これを差配したが、一一五四年、ウエスカ司教ドンはついに業を煮やしたのか、同人と連名でみずから同地への入植許可状を発給するにいたったのである。そこでは、各々の入植者に一定規模の土地区画が賦与され、同地住人のあいだではそれらの売買・抵当・贈与が可能となること、教会十分の一税ならびに初穂納入以外の「悪しき貢租(malo censu)」は全面的に免除されること、そのほかに入植者に対する裁判諸規定がことこまかに明記されている。⁹⁰⁾

四 結論

征服による政治空間の急激な拡張は、城塞を核とする新たな空間の組織原理を生み出す一方で、強権的な城主権力と、それを地誌的に実体化した新たな定住様式が生まれてくる道のりを阻害していたようにみえる。つまり、征服なくして城主支配圏の生成も、封建的支配関係の全面的な普及もなかったのであるが、それが同時にそれらの確立を阻んでしまうという関係にあったようにみえるのである。だが一見、矛盾するかにみえるこうした関係は、イスラームとの戦闘にさらされたわたしたちの地域のような、ヨーロッパの「辺境」に固有のものではけっしてない。

実際、順調なインカステラメントが進行したとされる諸地域でも、一城塞と一集落が対応するような城主支配の緊縮したユニットが成立する過程で、つねに無主地の征服という現象が広範に生じている。それが、わたしたちの地域のように一つの方に集中する傾向がみられないのは、もともと人口密度が比較的高い地域でくりひろげられたからにすぎない。その意味では、ピレネー山脈以北が経済成長の組織化あるいは稠密化という形でいわば内向きの拡大をとるのに対して、ピレネー山脈以南が外向きの拡大をとっていたという違いがあるにすぎない。ラティウム地方では、城主主導の組織的なインカステラメント現象はしばしば解放特許状を媒介としていたし、そうした上からの組織的な入植の形跡がなく、農民の自発性が重視される下ラングドックでも、カストルム集落と従来の散居定住地とは、賦課租の軽重に明白な差異があったことが知られている。⁹¹⁾いずれの場合にも、わたしたちの地域とまったく同じように、まさしく空間的・社会的な流動性と

いうファクターがそこには内包されているのである。

だから、封建制の成立を攪乱する要因が、スペイン北部ではほかにまましてきわだつていたというのは妥当ではない。そうではなくて、なかば独立状態の緊縮した支配と経営のユニットが人的紐帯によってむすびあう封建制というシステムそのものが、不断の経済発展と、それに必然的にもなうことになる空間的・社会的流動性なくしては、そもそも安定的に維持されえないということである。それが、ヨーロッパの拡大と表現されるように外向きのベクトルをとるか、マルク・ブロックの「大開墾時代」⁽¹⁾のように内向きのベクトルをとるかで差異があるにしても、封建制はそうした不断の拡大という現象に依存した特殊なシステムであり、その意味では、それが最も顕著にあらわれるヨーロッパの「辺境」をむしる参照軸として、ヨーロッパ全体を眺めるまなざしが必要になってくると考えられるのである。

註

* 本稿で使用される諸記号の内容は次のとおりである。CDAL: J. A. Lema Pueyo, Colección diplomática de Alfonso I de Aragón y Pamplona (1104-1134), San Sebastián, 1990; CDCH: A. Durán Gudiol, Colección diplomática de la catedral de Huesca, 2 vols., Zaragoza, 1965-1969; CDPI: A. Ubieta Arteita, Colección diplomática de Pedro I de Aragón y Navarra, Zaragoza, 1951; DERRVE: J. M. Lacarra, Documentos para el estudio de la reconquista y repoblación del valle del Ebro, 2 vols., Zaragoza, 1982-1985; DMH: C. Laliena Corbera, Documentos municipales de Huesca, 1100-1350, Huesca, 1988; DRIL: A. Ubieta Arteita, Documentos de Ramiro II de Aragón, Zaragoza, 1988; DSRI: J. Salarrullana, Documentos correspondientes al reinado de Sancho Ramírez, desde 1063 hasta 1094. I: documentos reales, Zaragoza, 1907.

(1) G. Fournier, "Châteaux et peuplements au Moyen Âge. Essai de synthèse", *Châteaux et peuplements en Europe occidentale du X^e au XVIII^e siècle*, Auch, 1980, pp.131-144.

(2) ヒーレル・トゥーヘールのインカステラメント・モデルは、おおよそ次のように説明される。もともとイタリア北・中部では、北西ヨーロッパの古典荘園制を彷彿とさせる領主所領が発達していた。だが、一〇世紀までにそうした所領の間隙をついて、独立農民を主体とする入植・開墾運動がくりひろげられ、そうした農村の経済成長を基盤として、農村の空間組織は一〇世紀を境に劇的に刷新される。領主は、所領の中心から隔絶したそれまで占有されたところのない高地に城塞を建設し、それと同時に土地保有農民ならびに独立農民の家屋をその周囲に強制的に、あるいは入植許可状を発給することによって組織的に誘致してゆくのである。こうして形成された高地集落は、柵や石造囲壁で全体が覆われて、定住地全体が城塞とみまじりあうばかりの城塞集落と化し、それじたいがカストール(castrum)またはカステッルム(castellum)と呼ばれ、従来のあらゆる定住地呼称にとつかわれるのである。さらに一世紀中葉にいたるまでに、カストールに付属する固有の領域がはつきりと姿をあらわし、その内部ではきわめて組織的に農地編成が行われてゆくことになる。P. Toubert, "L'Italie rurale aux VIII^e-IX^e siècles. Essai de typologie domaniale", *I problemi dell'Occidente nel secolo VIII* (Settimane 20), Spoleto, 1973, t.1, pp.95-132; id., *Les structures du Latium médiéval. Le Latium méridional et la Sabine du IX^e siècle à la fin du XII^e siècle*, 2 vols., Rome, 1973, t.1, pp.303-368, 136あたりの議論は、わが国でも城戸照子によって詳しく紹介されている。城戸照子「インカステラメント・集村化・都市」『西欧中世史(中)』ミネルヴァ書房、一九九五年、一九頁、一五〇頁。

(3) フランス南部ではインカステラメントのさまざまな局面での不徹底さが指摘されている。従来の散居定住地であるヴィラと、新たな高地防備集落であるカストールが長期にわたって並存することもしばしばあり、ミテラウム地方のちうじーに、従来の定住形態が廃絶しなかった点に特徴がある。しかもその歩みはきわめて緩やかで、高地化の度合いも低かった。とくにトラングドックでは、カストール集落への移行には一世紀後半から一世紀末葉と長い時間を要したが、これはイタリア中部のように領主にによる強制移住や積極的な誘致が行われず、もっぱら農民側のイニシアティブが勝っていたためと想定されている。またカスコーニのインカステラメント現象の

絶頂期に達して13世紀に入るとかなり衰へて、しかも城塞が高台の頂上には農村の居住区がその中腹を占めていたと推定される。この特徴が13世紀のM. Bourin-Derruau, *Villages médiévaux en Bas-Languedoc: Genèse d'une sociabilité* (X^e-XIV^e siècles), 2 vols., Tours, 1987; B. Cursente, *«Castra» et castelnaux dans le Midi de la France (XI^e-XV^e siècles)*, Châteaux et peuplements, pp.31-55. フロントニストの「土木建築」——中世フロントニスト地方におけるカストルムの形成過程』『国史研究』第184号——1977年 3月号 50頁。

- ④ J. Gautier-Dalché, "Reconquête et structures de l'habitat en Castille", *Guerre, fortification et habitat dans le monde méditerranéen au Moyen Âge* (Castrum 3), Madrid, 1988, pp.199-206; J. A. García de Cortázar, "Organización del espacio, organización del poder entre el Cantábrico y el Duero en los siglos VIII a XIII", *Del Cantábrico al Duero: trece estudios sobre organización social del espacio en los siglos VIII a XIII*, Santander, 1999, pp.15-48. ロベール・バスカス・バルバレスによれば、城塞は10世紀から11世紀にかけてたしかに農村定住の核をなしたが、11世紀末葉以降には村落が主権の中心（特許状）に変わって、「領土」、この農村空間の組織中心となる。この点について、城塞は貴族に賦与されるが、領域中心としての重要性はむしろ主権の支配にあり、「領土」化した村落に移行して、城塞はむしろ貴族所領の中心にならなくなる。R. Vázquez Álvarez, "Castros, castillos y torres en la organización social del espacio en Castilla: el espacio del Arlanza al Duero (siglos IX a XIII)", *Del Cantábrico al Duero*, pp.351-373.

- ⑤ C. Laliena Corbera et Ph. Sénac, *Musulmans et chrétiens dans le haut Moyen Âge: aux origines de la reconquête aragonaise*, Paris, 1991; id., "La formación de las estructuras señoriales en Aragón (ca.1083-ca.1206)", *Señorío y feudalismo en la Península Ibérica*, 4 vols., Zaragoza, 1993, t.1, pp.553-585; id., "Una revolución silenciosa. Transformaciones de la aristocracia navarro-aragonesa bajo Sancho el Mayor", *Aragón en la Edad Media*, 10-11, Zaragoza, 1993, pp.481-502; id., "Regis fevales: la distribución de honores y dominios durante la conquista de Huesca, 1083-1104", *Homenaje a don Antonio Durán Gudiol*, Huesca, 1995, pp.499-514; id., *La formación del Estado feudal*, Aragón y Navarra en la época de

Pedro I, Huesca, 1996; id., "Expansión territorial, ruptura social y desarrollo de la sociedad feudal en el valle del Ebro, 1080-1120", *De Toledo a Huesca. Sociedades medievales en transición a finales del siglo XI* (1080-1100), Zaragoza, 1998, pp.199-227.

- ⑥ C. Stalls, *Possessing the Land. Aragon's Expansion in Islam's Ebro Frontier under Alfonso the Battler*, 1104-1134, Leiden, 1995, pp.82-83, 115-138; id., "The Relationship between Conquest and Settlement on the Aragonese Frontier of Alfonso I", *Iberia and the Mediterranean World of the Middle Ages: Studies in Honor of Robert I. Burns*, 2 vols., Leiden, 1995, t.1, pp.216-231.

- ⑦ 中世カスティーリャ＝レオン公の泰オニル・バルバ・サントネス・バルボレンスの数々の領地をレオンの征服による。C. Sánchez Albornoz, "Conséquences de la reconquête et du repeuplement sur les institutions féodo-vassaliques de León et de Castille", *Les structures sociales de l'Aquitaine, du Languedoc et de l'Espagne au premier âge féodal*, Paris, 1969, pp.359-370; id., "Pequeños propietarios libres en el reino asturleonés. Su realidad histórica", *Agricultura e mundo rural en Occidente nell'alto medioevo* (Settimane 13), Spoleto, 1966, pp.183-222. ユリウス・セツマン（Settimane 13, Spoleto, 1966, pp.183-222. ユリウス・セツマン）は後半からカスティーリャ＝レオン公の泰オニル・バルバ・サントネスの封建制の確立を主張するものだが、この点に学説上の転換を促す。P. Bonnassie, "Du Rhône à la Galice: genèse et modalités du régime féodal", *Structures féodales et féodalisme dans l'Occident méditerranéen* (X^e-XIII^e siècles), Bilan et perspectives de recherches, Paris, 1980, pp.17-84.

- ⑧ たたしハカ司教管区に統治されるため、厳密にはウエスカ＝ハカ司教管区にのみ、新たに征服されたレオン・カスティーリャ系以南の平野地帯に相対する。このウエスカ＝ハカ司教座と「国王礼拝堂（capella regis）」と呼ばれ、主権の直屬におかれたモンテアラティン修道参事会が、ウエスカのモスクや教会を筆頭に教区教会と司教諸権利を分けあつた。前者の所領や教会は同地域の北西部から南東部にかけて、これに対して後者のそれはウエスカ北東のフルメン川からマデハルメー川流域を中心に展開している。モンテアラティン修道参事会が「国王礼拝堂」の王権に代り、同修道参事会傘下の教区教会は遠征のために良質のロバを1頭供出、またその領民は国王の要請に応じて軍役を負担する一方で、多数の教区教会や所領を賦与されるなど、手厚い保護を享受した。CDPL, doc.62

(1099, III). 同書は、征服後に生み出された新しい状態を背景に、11世紀初頭から13世紀にかけてローマ教皇庁を模倣したような領土の分割と、その後のJ. F. Utrilla Utrilla, "El dominio de la catedral de Huesca en el siglo XII: notas sobre su formación y localización", Aragón en la Edad Media, 6, 1984, pp.19-45.

(6) 同年四月十七日、国王サンチエ・デ・ナールスがカストルムの入植者に向けて入植許可状を発給している。DERVE, doc.2 (1069, IV, 27). なお、十字軍の先駆けとして高貴なバルバースロウ攻撃戦(1064年)で、アキテーヌ・ノルターニャ・ノルマンディー、そしてカタルーニャからの混成軍の手になるものであり、マルティン王國軍はまったく関係していない。

(5) DSRI, no.21 (1083, IV, 28); 貢租、貢担が象地、Tabernas, Sangarrén, Buñales, Torres de Almuniente, Vicién, Pueyo de Vicién, Barbués, Pitillas, Torres de Violada, Callén, Almúdevar, Formiñena などの11世紀の内部の明記はないが、先王のノルマ・ロ・セ(在位1035年-1064年)の治世に、ノルマルベの1部のマスリム定住地が負担した「貢租」は、穀物、葡萄酒、金・銀、毛織物、靴で構成されていた。A. J. Martín Duque, Colección diplomática del monasterio de San Victorián de Sobrarbe (1000-1219), Zaragoza, 2004, doc.25 (1049). また、1045年にアルカナーユ川からナンカ川までのマスリム定住地が負担していたのは、パン・葡萄酒・金・銀・布類であった。CDPI, doc.20 (1095).

(1) P. de Huesca, Teatro histórico de las iglesias del reino de Aragón, Pamplona, 1797, 7, pp.456-458 (1086, V). 回教聖地参事会の創建について、DERVE, doc.5 (1087, V, 30).

(2) DSRI, doc.22 (1084, II). ロベ・ノルマルベ・モネスとマル・サンチエスが建設した国王サンチエ・デ・ナールスがこれを両人の自用地として分け、同時に付属する領域の境界画定を行っている。

(3) DERVE, doc.5 (1087, IX, 30). すなわち国王城塞の保有者兄弟と想定されるサンチエ・アスナレスならびにペーロ・アスナレスが国王の命令によってカストルム建設を請け負い、付属領域内の放牧税ならびに貢租を国王と折半するようになったのである。

(4) DERVE, doc.11 (1091, IX). ノルマルベならびにサンチエ・アスナレス兄弟が既存の塔を再占有し、それを自用地として確保する一方、付属領域に住人からあがる収入については国王と折半することになった。フェルナンド・ガルティエル・マルティは、現存する塔遺構の構造から、トルモスを廃絶していたマスリム塔とみなしている。F.

Gallier Martí, "El verdadero castillo de Samitier", Turiaso, 7, 1987, pp.159-194.

(5) A. Ubieto Arreta, Historia de Aragón. La formación territorial, Zaragoza, 1981, pp.116-118.

(6) 年代記作者トニーヤ・デ・ベレーの11世紀の地域を「最も果しの辺境領(al-Tagr al-Aḡṣā)」、12世紀を「E. Lévi-Provençal, "La Description de l'Espagne" d'Almad al-Rāzī. Essai de reconstitution de l'original arabe et traduction française", Al-Andalus, 18, 1953, p.61; F. de la Granja, "La Marca Superior en la obra de al-'Uḡrī", Estudios de Edad Media de la Corona de Aragón, 8, 1967, p.18, 23.

(7) たいていはボルト1101年、2101年、2103年、2104年、2105年、2106年、2107年、2108年、2109年、2110年、2111年、2112年、2113年、2114年、2115年、2116年、2117年、2118年、2119年、2120年、2121年、2122年、2123年、2124年、2125年、2126年、2127年、2128年、2129年、2130年、2131年、2132年、2133年、2134年、2135年、2136年、2137年、2138年、2139年、2140年、2141年、2142年、2143年、2144年、2145年、2146年、2147年、2148年、2149年、2150年、2151年、2152年、2153年、2154年、2155年、2156年、2157年、2158年、2159年、2160年、2161年、2162年、2163年、2164年、2165年、2166年、2167年、2168年、2169年、2170年、2171年、2172年、2173年、2174年、2175年、2176年、2177年、2178年、2179年、2180年、2181年、2182年、2183年、2184年、2185年、2186年、2187年、2188年、2189年、2190年、2191年、2192年、2193年、2194年、2195年、2196年、2197年、2198年、2199年、2200年、2201年、2202年、2203年、2204年、2205年、2206年、2207年、2208年、2209年、2210年、2211年、2212年、2213年、2214年、2215年、2216年、2217年、2218年、2219年、2220年、2221年、2222年、2223年、2224年、2225年、2226年、2227年、2228年、2229年、2230年、2231年、2232年、2233年、2234年、2235年、2236年、2237年、2238年、2239年、2240年、2241年、2242年、2243年、2244年、2245年、2246年、2247年、2248年、2249年、2250年、2251年、2252年、2253年、2254年、2255年、2256年、2257年、2258年、2259年、2260年、2261年、2262年、2263年、2264年、2265年、2266年、2267年、2268年、2269年、2270年、2271年、2272年、2273年、2274年、2275年、2276年、2277年、2278年、2279年、2280年、2281年、2282年、2283年、2284年、2285年、2286年、2287年、2288年、2289年、2290年、2291年、2292年、2293年、2294年、2295年、2296年、2297年、2298年、2299年、2300年、2301年、2302年、2303年、2304年、2305年、2306年、2307年、2308年、2309年、2310年、2311年、2312年、2313年、2314年、2315年、2316年、2317年、2318年、2319年、2320年、2321年、2322年、2323年、2324年、2325年、2326年、2327年、2328年、2329年、2330年、2331年、2332年、2333年、2334年、2335年、2336年、2337年、2338年、2339年、2340年、2341年、2342年、2343年、2344年、2345年、2346年、2347年、2348年、2349年、2350年、2351年、2352年、2353年、2354年、2355年、2356年、2357年、2358年、2359年、2360年、2361年、2362年、2363年、2364年、2365年、2366年、2367年、2368年、2369年、2370年、2371年、2372年、2373年、2374年、2375年、2376年、2377年、2378年、2379年、2380年、2381年、2382年、2383年、2384年、2385年、2386年、2387年、2388年、2389年、2390年、2391年、2392年、2393年、2394年、2395年、2396年、2397年、2398年、2399年、2400年、2401年、2402年、2403年、2404年、2405年、2406年、2407年、2408年、2409年、2410年、2411年、2412年、2413年、2414年、2415年、2416年、2417年、2418年、2419年、2420年、2421年、2422年、2423年、2424年、2425年、2426年、2427年、2428年、2429年、2430年、2431年、2432年、2433年、2434年、2435年、2436年、2437年、2438年、2439年、2440年、2441年、2442年、2443年、2444年、2445年、2446年、2447年、2448年、2449年、2450年、2451年、2452年、2453年、2454年、2455年、2456年、2457年、2458年、2459年、2460年、2461年、2462年、2463年、2464年、2465年、2466年、2467年、2468年、2469年、2470年、2471年、2472年、2473年、2474年、2475年、2476年、2477年、2478年、2479年、2480年、2481年、2482年、2483年、2484年、2485年、2486年、2487年、2488年、2489年、2490年、2491年、2492年、2493年、2494年、2495年、2496年、2497年、2498年、2499年、2500年、2501年、2502年、2503年、2504年、2505年、2506年、2507年、2508年、2509年、2510年、2511年、2512年、2513年、2514年、2515年、2516年、2517年、2518年、2519年、2520年、2521年、2522年、2523年、2524年、2525年、2526年、2527年、2528年、2529年、2530年、2531年、2532年、2533年、2534年、2535年、2536年、2537年、2538年、2539年、2540年、2541年、2542年、2543年、2544年、2545年、2546年、2547年、2548年、2549年、2550年、2551年、2552年、2553年、2554年、2555年、2556年、2557年、2558年、2559年、2560年、2561年、2562年、2563年、2564年、2565年、2566年、2567年、2568年、2569年、2570年、2571年、2572年、2573年、2574年、2575年、2576年、2577年、2578年、2579年、2580年、2581年、2582年、2583年、2584年、2585年、2586年、2587年、2588年、2589年、2590年、2591年、2592年、2593年、2594年、2595年、2596年、2597年、2598年、2599年、2600年、2601年、2602年、2603年、2604年、2605年、2606年、2607年、2608年、2609年、2610年、2611年、2612年、2613年、2614年、2615年、2616年、2617年、2618年、2619年、2620年、2621年、2622年、2623年、2624年、2625年、2626年、2627年、2628年、2629年、2630年、2631年、2632年、2633年、2634年、2635年、2636年、2637年、2638年、2639年、2640年、2641年、2642年、2643年、2644年、2645年、2646年、2647年、2648年、2649年、2650年、2651年、2652年、2653年、2654年、2655年、2656年、2657年、2658年、2659年、2660年、2661年、2662年、2663年、2664年、2665年、2666年、2667年、2668年、2669年、2670年、2671年、2672年、2673年、2674年、2675年、2676年、2677年、2678年、2679年、2680年、2681年、2682年、2683年、2684年、2685年、2686年、2687年、2688年、2689年、2690年、2691年、2692年、2693年、2694年、2695年、2696年、2697年、2698年、2699年、2700年、2701年、2702年、2703年、2704年、2705年、2706年、2707年、2708年、2709年、2710年、2711年、2712年、2713年、2714年、2715年、2716年、2717年、2718年、2719年、2720年、2721年、2722年、2723年、2724年、2725年、2726年、2727年、2728年、2729年、2730年、2731年、2732年、2733年、2734年、2735年、2736年、2737年、2738年、2739年、2740年、2741年、2742年、2743年、2744年、2745年、2746年、2747年、2748年、2749年、2750年、2751年、2752年、2753年、2754年、2755年、2756年、2757年、2758年、2759年、2760年、2761年、2762年、2763年、2764年、2765年、2766年、2767年、2768年、2769年、2770年、2771年、2772年、2773年、2774年、2775年、2776年、2777年、2778年、2779年、2780年、2781年、2782年、2783年、2784年、2785年、2786年、2787年、2788年、2789年、2790年、2791年、2792年、2793年、2794年、2795年、2796年、2797年、2798年、2799年、2800年、2801年、2802年、2803年、2804年、2805年、2806年、2807年、2808年、2809年、2810年、2811年、2812年、2813年、2814年、2815年、2816年、2817年、2818年、2819年、2820年、2821年、2822年、2823年、2824年、2825年、2826年、2827年、2828年、2829年、2830年、2831年、2832年、2833年、2834年、2835年、2836年、2837年、2838年、2839年、2840年、2841年、2842年、2843年、2844年、2845年、2846年、2847年、2848年、2849年、2850年、2851年、2852年、2853年、2854年、2855年、2856年、2857年、2858年、2859年、2860年、2861年、2862年、2863年、2864年、2865年、2866年、2867年、2868年、2869年、2870年、2871年、2872年、2873年、2874年、2875年、2876年、2877年、2878年、2879年、2880年、2881年、2882年、2883年、2884年、2885年、2886年、2887年、2888年、2889年、2890年、2891年、2892年、2893年、2894年、2895年、2896年、2897年、2898年、2899年、2900年、2901年、2902年、2903年、2904年、2905年、2906年、2907年、2908年、2909年、2910年、2911年、2912年、2913年、2914年、2915年、2916年、2917年、2918年、2919年、2920年、2921年、2922年、2923年、2924年、2925年、2926年、2927年、2928年、2929年、2930年、2931年、2932年、2933年、2934年、2935年、2936年、2937年、2938年、2939年、2940年、2941年、2942年、2943年、2944年、2945年、2946年、2947年、2948年、2949年、2950年、2951年、2952年、2953年、2954年、2955年、2956年、2957年、2958年、2959年、2960年、2961年、2962年、2963年、2964年、2965年、2966年、2967年、2968年、2969年、2970年、2971年、2972年、2973年、2974年、2975年、2976年、2977年、2978年、2979年、2980年、2981年、2982年、2983年、2984年、2985年、2986年、2987年、2988年、2989年、2990年、2991年、2992年、2993年、2994年、2995年、2996年、2997年、2998年、2999年、3000年、3001年、3002年、3003年、3004年、3005年、3006年、3007年、3008年、3009年、3010年、3011年、3012年、3013年、3014年、3015年、3016年、3017年、3018年、3019年、3020年、3021年、3022年、3023年、3024年、3025年、3026年、3027年、3028年、3029年、3030年、3031年、3032年、3033年、3034年、3035年、3036年、3037年、3038年、3039年、3040年、3041年、3042年、3043年、3044年、3045年、3046年、3047年、3048年、3049年、3050年、3051年、3052年、3053年、3054年、3055年、3056年、3057年、3058年、3059年、3060年、3061年、3062年、3063年、3064年、3065年、3066年、3067年、3068年、3069年、3070年、3071年、3072年、3073年、3074年、3075年、3076年、3077年、3078年、3079年、3080年、3081年、3082年、3083年、3084年、3085年、3086年、3087年、3088年、3089年、3090年、3091年、3092年、3093年、3094年、3095年、3096年、3097年、3098年、3099年、3100年、3101年、3102年、3103年、3104年、3105年、3106年、3107年、3108年、3109年、3110年、3111年、3112年、3113年、3114年、3115年、3116年、3117年、3118年、3119年、3120年、3121年、3122年、3123年、3124年、3125年、3126年、3127年、3128年、3129年、3130年、3131年、3132年、3133年、3134年、3135年、3136年、3137年、3138年、3139年、3140年、3141年、3142年、3143年、3144年、3145年、3146年、3147年、3148年、3149年、3150年、3151年、3152年、3153年、3154年、3155年、3156年、3157年、3158年、3159年、3160年、3161年、3162年、3163年、3164年、3165年、3166年、3167年、3168年、3169年、3170年、3171年、3172年、3173年、3174年、3175年、3176年、3177年、3178年、3179年、3180年、3181年、3182年、3183年、3184年、3185年、3186年、3187年、3188年、3189年、3190年、3191年、3192年、3193年、3194年、3195年、3196年、3197年、3198年、3199年、3200年、3201年、3202年、3203年、3204年、3205年、3206年、3207年、3208年、3209年、3210年、3211年、3212年、3213年、3214年、3215年、3216年、3217年、3218年、3219年、3220年、3221年、3222年、3223年、3224年、3225年、3226年、3227年、3228年、3229年、3230年、3231年、3232年、3233年、3234年、3235年、3236年、3237年、3238年、3239年、3240年、3241年、3242年、3243年、3244年、3245年、3246年、3247年、3248年、3249年、3250年、3251年、3252年、3253年、3254年、3255年、3256年、3257年、3258年、3259年、3260年、3261年、3262年、3263年、3264年、3265年、3266年、3267年、3268年、3269年、3270年、3271年、3272年、3273年、3274年、3275年、3276年、3277年、3278年、3279年、3280年、3281年、3282年、3283年、3284年、3285年、3286年、3287年、3288年、3289年、3290年、3291年、3292年、3293年、3294年、3295年、3296年、3297年、3298年、3299年、3300年、3301年、3302年、3303年、3304年、3305年、3306年、3307年、3308年、3309年、3310年、3311年、3312年、3313年、3314年、3315年、3316年、3317年、3318年、3319年、3320年、3321年、3322年、3323年、3324年、3325年、3326年、3327年、3328年、3329年、3330年、3331年、3332年、3333年、3334年、3335年、3336年、3337年、3338年、3339年、3340年、3341年、3342年、3343年、3344年、3345年、3346年、3347年、3348年、3349年、3350年、3351年、3352年、3353年、3354年、3355年、3356年、3357年、3358年、3359年、3360年、3361年、3362年、3363年、3364年、3365年、3366年、3367年、3368年、3369年、3370年、3371年、3372年、3373年、3374年、3375年、3376年、3377年、3378年、3379年、3380年、3381年、3382年、3383年、3384年、3385年、3386年、3387年、3388年、3389年、3390年、3391年、3392年、3393年、3394年、3395年、3396年、3397年、3398年、3399年、3400年、3401年、3402年、3403年、3404年、3405年、3406年、3407年、3408年、3409年、3410年、3411年、3412年、3413年、3414年、3415年、3416年、3417年、3418年、3419年、3420年、3421年、3422年、3423年、3424年、3425年、3426年、3427年、3428年、3429年、3430年、3431年、3432年、3433年、3434年、3435年、3436年、3437年、3438年、3439年、3440年、3441年、3442年、3443年、3444年、3445年、3446年、3447年、3448年、3449年、3450年、3451年、3452年、3453年、3454年、3455年、3456年、3457年、3458年、3459年、3460年、3461年、3462年、3463年、3464年、3465年、3466年、3467年、3468年、3469年、3470年、3471年、3472年、3473年、3474年、3475年、3476年、3477年、3478年、3479年、3480年、3481年、3482年、3483年、3484年、3485年、3486年、3487年、3488年、3489年、3490年、3491年、3492年、3493年、3494年、3495年、3496年、3497年、3498年、3499年、3500年、3501年、3502年、3503年、3504年、3505年、3506年、3507年、3508年、3509年、3510年、3511年、3512年、3513年、3514年、3515年、3516年、3517年、3518年、3519年、3520年、3521年、3522年、3523年、3524年、3525年、3526年、3527年、3528年、3529年、3530年、3531年、3532年、3533年、3534年、3535年、3536年、3537年、3538年、3539年、3540年、3541年、3542年、3543年、3544年、3545年、3546年、3547年、3548年、3549年、3550年、3551年、3552年、3553年、3554年、3555年、3556年、3557年、3558年、3559年、3560年、3561年、3562年、3563年、3564年、3565年、3566年、3567年、3568年、3569年、3570年、3571年、3572年、3573年、3574年、3575年、3576年、3577年、3578年、3579年、3580年、3581年、3582年、3583年、3584年、3585年、3586年、3587年、3588年、3589年、3590年、3591年、3592年、3593年、3594年、3595年、3596年、3597年、3598年、3599年、3600年、3601年、3602年、3603年、3604年、3605年、3606年、3607年、3608年、3609年、3610年、3611年、3612年、3613年、3614年、3615年、3616年、3617年、3618年、3619年、3620年、3621年、3622年、3623年、3624年、3625年、3626年、3627年、3628年、3629年、3630年、3631年、3632年、3633年、3634年、3635年、3636年、3637年、3638年、3639年、3640年、3641年、3642年、3643年、3644年、3645年、3646年、3647年、3648年、3649年、3650年、3651年、3652年、3653年、3654年、3655年、3656年、3657年、3658年、3659年、3660年、3661年、3662年、3663年、3664年、3665年、3666年、3667年、3668年、3669年、3670年、3671年、3672年、3673年、3674年、3675年、3676年、3677年、3678年、3679年、3680年、3681年、3682年、3683年、3684年、3685年、3686年、3687年、3688年、3689年、3690年、3691年、3692年、3693年、3694年、3695年、3696年、3697年、3698年、3699年、3700年、3701年、3702年、3703年、3704年、3705年、3706年、3707年、3708年、3709年、3710年、3711年、3712年、3713年、3714年、3715年、3716年、3717年、3718年、3719年、3720年、3721年、3722年、3723年、3724年、3725年、3726年、3727年、3728年、3729年、3730年、3731年、3732年、3733年、3734年、3735年、3736年、3737年、3738年、3739年、3740年、3741年、3742年、3743年、3744年、3745年、3746年、3747年、3748年、3749年、3750年、3751年、3752年、3753年、3754年、3755年、3756年、3757年、3758年、3759年、3760年、3761年、3762年、3763年、3764年、3765年、3766年、3767年、3768年、3769年、3770年、3771年、3772年、3773年、3774年、3775年、3776年、3777年、3778年、3779年、3780年、3781年、3782年、3783年、3784年、3785年、3786年、3787年、3788年、3789年、3790年、3791年、3792年、3793年、3794年、3795年、3796年、3797年、3798年、3799年、3800年、3801年、3802年、3803年、3804年、3805年、3806年、3807年、3808年、3809年、3810年、3811年、3812年、3813年、3814年、3815年、3816年、3817年、3818年、3819年、3820年、3821年、3822年、3823年、3824年、3825年、3826年、3827年、3828年、3829年、3830年、3831年、3832年、3833年、3834年、3835年、3836年、3837年、3838年、3839年、3840年、3841年、3842年、3843年、3844年、3845年、3846年、3847年、3848年、3849年、3850年、3851年、3852年、3853年、3854年、3855年、3856年、3857年、3858年、3859年、3860年、3861年、3862年、3863年、3864年、3865年、3866年、3867年、3868年、3869年、3870年、3871年、3872年、3873年、3874年、3875年、3876年、3877年、3878年、3879年、3880年、3881年、3882年、3883年、3884年、3885年、3886年、3887年、3888年、3889年、3890年、3891年、3892年、3893年、3894年、3895年、3896年、3897年、3898年、3899年、3900年、3901年、3902年、3903年、3904年、3905年、3906年、3907年、3908年、3909年、3910年、3911年、3912年、3913年、3914年、3915年、3916年、3917年、3918年、3919年、3920年、3921年、3922年、3923年、3924年、39

Nocto, Olson, Riglos, Ruesta, Sabiñánigo, Samitier, Sarsa, Secorín, Senegüé, Siresa, Sos, Surtá, Tena, Unastillo.

²²⁾ Benabarre, Capella, Castro, Fantova, Laguardes, Monclús, Perraria, San Martín, Toledo, Torreciudad, Troncedo.

²³⁾ 多く見種もつてもせいぜい五家系とつたところである。このなかで最も権勢を誇ったのが、国王サンチョ三世に比べ、アラゴン王国の分離・独立後に初代国王ミロー一世のもとに参じたヒメノ・ガルセスの家系である。この人物はナバラ国王サンチョ・ガルセス二世（在位九七〇年～九九四年）の実弟ミロー・ガルセスの孫と想定されており、アラゴン王国に帰順するミロー一世の「養育長」（エイタン(cellan)）バスク語で「父」の意）の称号を得て、アタレス・ホルターニャ・ソスほか七城塞拠点を確保しつつけた。さらに同人の実子にして一世紀中葉の王国最有力の貴族サンチョ・ガリンセスもやはり国王サンチョ・ラミレスの「養育長」を務め、ホルターニャ・ソス、アタレスほか七城塞を継承している。さらにその息子ペドロ・サンチェスは、国王ペドロ一世の「乳兄弟（colactaneus）」と称し、ホルターニャほか七城塞を保有し、ウエスカ征服後は同都市を五名のバロンとともに共同で管理している。Ag. Ubieto Arteta, Los “tenientes” en Aragón y Navarra en los siglos XI y XII, Valencia, 1973, pp.237-238, 264, 274.

²⁴⁾ カタルーニャにおける封建的約定のつづのテンフエニエンティマ（conventientia）文書について P. Bomassie, “Les conventions féodales dans la Catalogne du XI^e siècle”, Les structures sociales, pp. 529-559. また封建的約定にかかわるテンフエニエンティマ文書のより幅広い用例に光を浴びた A. J. Kost, Making Agreements in Medieval Catalonia. Power, Order, and the Written Word, 1000-1200, Cambridge, 2001, pp. 43-52. さらにまたテン国王がカタルーニャ貴族と締結した封建的約定は、カタルーニャ式のテンフエニエンティマ形式がとられている。たとえば、国王ペドロ一世とウルジェイ伯アルメンゴル五世との「下リバゴルサのモンシエストラ城をめぐる城塞保有契約がそれである」CDPL, doc.105 (1101.XII).

²⁵⁾ その際には、一般に貴族が地名を冠する場面にみられる《de》ではなく、国王が王国名称を冠する際と同様に《in》を用いて城塞の地名を冠するのが通例である。

²⁶⁾ 拙稿「十一世紀アラゴン王国における国王法廷と和解」『史料・八三巻第六号』二〇〇〇年、八五頁、八八頁、九三頁、九六頁。

²⁷⁾ DSRI, doc.22 (1084.II); CDPL, doc.85 (1100.VII); CDCH, doc.92

(1100-1104).

²⁸⁾ 日本語で CDPL, doc.44 (1098.I-III). 日本語で「ホルティ・オルティスと」アルケーサル修道参事会長カレントがこの任にあたり、土地の分与を内容とする証書は《albara》と呼ばれている。

²⁹⁾ CDPL, doc.152 (1134.XII). 冒頭で「carta de fueros et usaticos quod habuerunt infanzones et barones de Aragone cum rege don Petro, cui sit requies」というタイトルがつけられた当該文書発給の特異な経緯については後述。「国王ホルを保有するセニョール (illos seniores qui tenent illas honores regales)」が負担すべき軍事奉仕義務について「quod serviant illas ad regem ubi fuerit suum corpus de rege tres menses in anno inter ita et stata in oste et ventia」とある。これに対し、ホルを保有しないバロンやインファン（infanzón）（自由人）は、野戦ならびに城攻めに際しての三日間の軍事奉仕にとめられている。これは、生来のインファンソン、国王への奉仕の恩賞として解放特許状を獲得した者、フエロおよび入植許可状に基いてまだ未だ特権を賦与された都市や新たな入植地の住人が享受した特権であり、その意味では、王国の全自由人が年間三日の軍役を要する負担していたといえることになる。インファンソンの法的身分規定については、CDPL, doc.62 (1099.III), エベス・Z・ジャンセンが、王国の全自由人が軍役を負担していたのだから「一般臣民」が公権力としての觀念が依然として存続していたと想定している。T. N. Bisson, “The Problem of Feudal Monarchy: Aragón, Catalonia and France”, Medieval France and her Pyrenean Neighbours, London, 1989, pp.237-255.

³⁰⁾ 唯一の例外が、ムーロ・ミリスをシムカ川下流域のマサフラスの保有者に任命した一〇〇〇年七月の国王証書である。日本語でホル騎士の動機について、同人が国王に対して城塞に果たつてた愛に勝つて（propter amorem quod tu fidelis mihi sedas et fideliter me servias）と、同人がアラゴン王国の出身者である（quia te facis naturale de mea terra）が重要なファクターとなっている。CDPL, doc.85 (1100.VII).

³¹⁾ DSRI, doc.21 (1083.IV,28). なお城塞領域よりあがる全収入を国王と折半するケースは、国王ホルとつづ編成されなかった城塞や塔の場合にみられる。前註²⁹⁾、³⁰⁾、³⁶⁾参照。

³²⁾ Huesca, Montearagón, Robres, Labata, Alcalá, Fañanas, Albero Alto, Albero Bajo, Usón, Novales, Argavieso, Pueyo de Fañanas, Curbe, Puibolea, Sabayés, Ayerbe, Santa Eualia, Sariñena, Abiego,

- Bolea, Bellestar, Ballellas, Marcén, Piracés, Callén, Sangarrén, Viçien, Tramaced, Grañén, Almuniente, Artasona, Sieso, Antillón, Placensia, Bospén, Pitillas, Pertusa, Petalta de Alcofa, Angüés, Ayerbe, トーシー・イン・ハーパーン、ウズリー、ヤークト・ユング、たアラゴン語著作家が言及した「城塞 (hisn)」所在地は「Labata, Novales, Sen y Men, Bolea, Piracés, Antillón, Ayerbe, Gabarda と 8^o. Gabarda と」キリスト教徒に与えられた所有地であった。Ph. Sénac, "Les hisn du Tağr al-Aḡṣā: à la recherche d'une frontière septentrionale d'al-Andalus à l'époque omeyyade", *Frontière et peuplement dans le monde méditerranéen au Moyen Âge* (Castrum 4), Rome-Madrid, 1992, pp.76-84; id., "Le peuplement musulman dans le district de Huesca (VIII^e-XII^e siècles)", *La Marche Supérieure d'al-Andalus et l'Occident chrétien*, Madrid, 1991, pp.51-65; id., "Peuplement et habitats ruraux dans la Marche Supérieure d'al-Andalus: l'Aragon", *Villages et villageoise au Moyen Âge*, Paris, 1992, pp.27-38; id., "Du hisn musulman au castrum chrétien. Le peuplement rural de la Marche Supérieure et la reconquête aragonaise", *De Toledo a Huesca*, pp.113-130; C. Laliena Corbera et Ph. Sénac, *Muslimans et chrétiens*, pp.61-67.
- (33) 上の語に「Azafaz, Culla, Miravet, Monroy, Nocito, Oropesa. したがって彼のホノールは、フン・ゴムネー地域やアルカナード川以東、はてはレバンテ地方にまで分布していたことになる。また彼の息子フェリスは、ウエスカ、モンテアムリコン、サンタ・エウアリヤを継承し、これらのほかにベルトラーサ、さらには地中海沿岸のオルタ・タ・タルトラーザ（いずれも共同管理）をも保有している。
- (34) 同人はまた、結局ホノール化されなかったオリビ生産の一大拠点アラスクエスの一分をも保有していた。CDPL, doc.111 (1113.IV.13).
- (35) DERRVE, doc.58 (1119.XII.13); CDCH, doc.153 (1139).
- (36) その意味では、一般に在地化した貴族の印とされる地名を人名に冠する慣行は、わたしたちの地域では在地化の程度ではなく、むしろ移動性の高さに由来するものといえるかもしれない。
- (37) Huesca, Montearagón, Santa Eulalia.
- (38) 前掲「Labata, Antillón, Castejon de la Plana, Horta de Tortosa, Naya, Pertusa, Secorún. 後掲「ヒゴト」Huesca, Alquézar, Bolea, Boliña, Escatrón, Labata, Loarre.
- (39) Bolea, Loarre, Placensia del Monte.
- (40) 上のほかにも、女性にちなむホノール継承の例としては、国王アル

フォンソー一世に重用されたベアルン副伯ガストン（サラゴース、モンレアル、ウンカステイリーヨ、バルバストロ、ウエスカ）の寡婦チレーザ（アビエス、アタレス、ボルハ、リエナス、ウンカステイリーヨ、サラゴース、ウエスカ）がいる。

- (41) 同人は、フェリスならびにファン・ガリンドスとともに同地の入植事業を推進して共同保有者となった。DERRVE, doc.172 (1128), 221 (1133.D).

(42) 上の点については、ホノール賦与に際してアラゴン王国の出身者であることを強調したペドロ一世の国王証書を想起すべきである。前註30参照。またアルフォンソー一世の戦死（一二四四年）直後に発給された前述の「国王ペドロ一世治世の慣習法文書」は、同国王のそうした姿勢に不満を募らせたアラゴン貴族が、ホノール保有者を自分たちに限定するべく配慮した規定を含んでいる。CDPL, doc.152 (1134.XII): «non ibi misisset dominus rex hominem de alias terras». したがって同国王の治世とその功績は、この国王の二一世のまじりあからまじに無視されることになる。フェリーロ二世がバルセローナ伯フモン・バランゲー四世にアラゴン王国全体を贈与することは一三三七年の文書に於て、王国の慣習を遵守するよう規定した次のような文言がある。F. Miquel Rosell, *Liber Feudorum Maior*, Barcelona, 1945, doc.7 (1137.VIII.11): «salvis usaticis et consuetudinibus quas pater meus Sancius vel frater meus Petrus habuerunt in regno suo». したがってアルフォンソー一世の名前が含まれていないのである。

- (43) C. Stalls, *Possessing the Land*, pp.115-130.

- (44) CDCH, doc.64 (1097.IV.5), 92 (1100-1104).

(45) アルカナードレ川以東のコンチエル、ウエルタ・デ・ペロ、フォルニリーヨといった国王ホノール城塞や、われわれの地域でも国王ホノールではなかったものの「セサ」といった城塞では、寄進に際して、それまでそれなれを保有していたバロンに、国王が新たに征服された城塞を賦与して補償するまで、寄進先の教会や修道院に対して奉仕することと明記されている。補償の可能性がゆえに念頭おかれているあたり、領域拡張に並行して国王のホノール賦与能力も増大しつつあったことをものがたるものと考えられる。CDPL, doc.50 (1098.V.2), 72 (1099.XI), 96 (1101.V.5), 132 (1103.X), ウエルタ・デ・クロの場合、ヒメノ・ガリンドスがこれを保有していたが、一二〇四年にアルケサル修道参事会によって、国王の確認のもと、同地の有力家系出自のヒメノ・サンチェス・デ・ウエルタが新たな保有者に任ぜられていた。CDPL, doc.143 (1104.VII).

(46) 同人の息子ロベ・サンチェス・デ・ベルチーテとウエスカ司教との紛争を内容とする一一三九年の文書では、同人がロベの兄ガリント・サンチェスとともに、同城塞をめぐって長きにわたる紛争を司教とくりひろげてきたと語られている。ここで司教は、かわりにタヘルナスなどをロベに賦するところを和解をはかっている。CDCH, doc.153 (1139).

(47) この種の例はほかに、サン・フアン・デ・リ・ペーニャ修道院に二分の一が寄進されたビエン、同修道院に完全に帰属するところになったリナーリヤスでもみつけられる。前者については、CDPL, doc.98 (1101.V), 後者は、CDPL, doc.80 (1100.II.5), 98 (1101.V); DRIL, doc.88 (1136). ここには、城塞保有を条件とする契約的な家士関係ではなく、家士関係が先に立ってはじめて城塞保有が可能になるような、スペイン学界で長らく「生来の家士」と呼ばれてきた関係のあり方が依然として存在するのかもしれない。あるいはむしろ文書を介さないだけで、カタルニャ式の「優先オマージュ」に相当するものがあった可能性も否定できない。P. Bomassie, "Du Rhône à la Calice", pp.17-84.

(48) 同人は、アルフォンソ一世のもうひとつの兄弟 Bolea, Catalunyaud, Castejón del Puente, Logroño, Momacastro, Monzón, Sos, Tudela を保有した。CDPL, doc.152 (1134.XII), また前註(49)、(42)参照。

(49) DERIVE, doc.155 (1128.III), 157 (1128.V); DRIL, doc.29 (1134). またアルフォンソ一世治世にも、同地域におけるホノールの自有地化の例として、ヘラルタ・デ・アルコフエアを保有するイン・ガリントスに同城塞を賦与した一件が唯一知られている。DERIVE, doc.21 (1105.III).

(50) 前述のガリーサの塔、アルタソーナ、トルモスならびにヒオータがそこである。また、境界画定されたアイエル・領域のなかに登場する《Illa torre de Senior García Sanz de Mont Ferrugall》がそのカレトリに含まれる。DSRI, doc.21 (1083.IV.28).

(51) 同カストルムは、王子ラミロを養育するサン・ポンス・ド・トミエール修道院に寄進された。CDPL, doc.33 (1097.V.8).

(52) いずれもウエスカ司教座に寄進されている。一一〇三年一〇月に同司教座に寄進されたセサは、のちにグアティサレーマ川流域における同司教座の中核所領に成長してゆくことになる。CDPL, doc.132 (1103.X), タヘルナスは、一〇九七年に寄進されたが、このときもに寄進されたファニヤナスをめぐって一一三九年に司教と保有者家門が紛争をくりひろげたとき、和解のために補償として後者に贈与さ

れている。CDCH, doc.153 (1139).

(54) いずれもウエスカ司教に寄進されたが、保有者は依然として国王証書の下署に名を連ねていたことはすでにみたとおりである。前註(44)、(46)参照。

(55) 前註(42)参照。

(56) Ph. Sénac, "Châteaux et peuplement en Aragon du VIII^e au XI^e siècle", 《L'Incastellamento》, Actes des rencontres de Gérone (26-27 novembre 1992) et de Rome (5-7 mai 1994), Rome, 1998, pp.123-140; id., "Du hisn musulman", pp.115-118, ムスリムの灌漑システムまた、強権的な支配権力をともなわなかったからかといえは共同体的な性格を色濃く帯びていたとされる。たとえば、T. F. Gluck, From Muslim Fortress to Christian Castle, Social and Cultural Change in Medieval Spain, Manchester, 1995, pp.67-76.

(57) DERIVE, doc.191 (1130); CDAL, doc.274 (1134.II).

(58) DERIVE, doc.136 (1127.II), このときトルモスのカストルムと「フェラ」サンチヨ・ガルセス・デ・ナバスケスに「封地 (fevum)」として賦与されたが、ホノール・システムには統合されなかった。なお入植者は、騎士(caballeros)に灌漑地「エガーダ」、歩兵(peones)に同じく「エガーダ」がそれぞれ賦与され、エハアのフェロと同様にそれぞれ異なる特権を享受できるものと規定されている。エハアのフェロに、DERIVE, doc.40, 41 (1100.VII), 105 (1124.XII).

(59) アルタソーナは、一〇八七年にカストルム建設が企図されて以来、教会は一貫して存在したが、一一三〇年のフェロによれば、その付属領域は「五年間ずっと荒蕪地のままであった (toto illo ermo qui ibi est de V. annos in suso)」。ここには教会十分の一税以外のあらゆる貢租、流通税、放牧税の免除、裁判特権の賦与を梃子に入植がはかられているが、結局一一三四年に再度入植許可状が発給されるといふ事態となっている。DERIVE, doc.191 (1130); CDAL, doc.274 (1134.II).

(60) CDCH, doc.92 (1100-1104), この段階にいたってもなお、領域の境界確定がなされていなかったため、マンシオ・ヒメネス(マルセン保有者)ならびにルアル・イニェス(サングエサ保有者)によって実地検分が行われている。

(61) CDCH, doc.121 (c.1105).

(62) DERIVE, doc.218 (1133.I); 《medietatem villae et castri que dicitur Curb, cum omnibus suis terminis heremis et populatis ab integro, et cum omnibus suis pascuis et aquis, silvis et garciis ad propriam hereditatem... mando vobis ut populetis eam quam cicius

poteristis atque facitis ibi bonam forzam ad honorem tocius christianitatis».

- (93) DSRL, doc.21 (1083.IV.28); DERRVE, doc.81 (1122?), doc.113 (1125.I).
- (94) 一〇一年、カストルム囲壁内の一區画が家屋建設用地としてガルシア・イニグスに賦与された。同人はこれを「騎士封(cavallarizas)」として編成するよう命じられている。CDPI, doc.102 (1101.IX).
- (95) 一〇〇年、国王ペドロ一世は「サン・ファン・デ・ラ・ペーニャ修道院に対して、カリエンならびにビシエンのカストルム内に家屋を建設し、入植を進めて、建設された各家屋から一名の守備兵を徴発するように要請している。CDPI, doc.80 (1100.III).
- (96) 一〇五年、イニ・パンソ・ネスに廃絶したムスリム家屋と荒蕪地が賦与された。CDPI, doc.149 (1105). 一〇四年には、カストルム領域内の放棄されたムスリムの家屋と土地財産、さらには城塞(カステルム)に近接した家屋新設用地が、ガルシア・ガルセスに賦与されている。DERRVE, doc.238 (1140.XII).
- (97) 一〇三年、城塞(カステルム)そばの一画がオルティ・オルティスに賦与され、家屋の建設と、新設された各家屋に武装されたキリスト教徒兵士の配備が義務づけられている。CDCH, doc.87 (1103.III).
- (98) 一〇二年、ムスリムの家屋とともに、城塞(カステルム)周囲の一画がガリンド・ダットに賦与され、みずからそこに駐屯する、さもなければ建設された各家屋に武装されたキリスト教徒の兵士を一名ずつ常駐させるよう命じられている。CDPI, doc.112 (1102.V).
- (99) 一〇九年、オリオル・ガルセス・デ・カストロ(カストロのパロ)に対して、同地におけるニウガータの荒蕪地と、家屋の建設用地が賦与されている。DERRVE, doc.176 (1129.I).
- (100) 一〇二年、ロベ・イニグスに対して、同地における家屋新設用地と、ムスリムの土地財産とともに賦与されている。CDPI, doc.116 (1102.XI). 考古学的にも、従来のムスリム定住地から約二〇〇メートル離れた区域に新たなキリスト教徒定住地が形成されたことが確認されている。Ph. Sotac, "Du hisn musulman", pp.116-117.
- (101) 同地には、ムスリム貴族の所領をひとつとして灌漑地が数多く所在した。CDCH, doc.88 (1097-1103.VII.18), 104 (1108.XII), 121 c.(1105).
- ここでは一〇四年、ムスリム家屋と非灌漑地での土地取得・開墾権が国王役人ガリンド・プラスケスに賦与され、一〇六年には、囲壁内の家屋群と、囲壁の外の家屋新設用地がヒメノ・アナイスおよびガ

リンド・アスナレス、そして同時期にガリンド・ダットにも分与され、家屋の建設、入植の促進、武装されたキリスト教徒の配備が国王アルフォンソ一世によって命じられていた。⁸⁰ CDPi, doc.138 (1104.D); CDAL, doc.13 (1106); DERIVE, doc.27 (1106.D).

- (70) 前註(59)参照。
 (71) 前註(61)-(62)参照。
 (72) 前註(63)参照。
 (73) CDPI, doc.132 (1103); CDCH, doc.99 (1106?), 103 (1107), 116 (1114), 135 (1133).
 (74) C. Laliena Corbera y J. F. Utrilla Utrilla, "Reconquista y repoblación. Morfogenésis de algunas comunidades rurales altoaragonesas en el siglo XII", Aragón en la Edad Media, 13, 1997, pp.5-40.
 (75) C. Laliena Corbera et Ph. Sénac, Musulmans et chrétiens, p.68; Ph. Sénac, "Peuplement et habitats ruraux", pp.34-35; X. Eritja Ciuró, De l'almunia a la turris: organització de l'espai a la regió de Lleida (segles XI-XIII), Lleida, 1998, pp.16-17.
 (76) Ph. Sénac, "Du hisn musulman", pp.119-125; id., "Notes sur les husun de Lérida", Mélanges de la Casa de Velázquez, 24, 1988, pp.53-69; id., "Notes sur le peuplement musulman dans la région de Barbiṭāniya", Studia Islāmica, 73, 1991, pp.45-66.
 (77) אֲמוּנְיָה דִּבְעוֹמַתָא 《almunia de Iben Algarbo》《almunia de Abin Zevala》《almunia de Ibentema》《Almunia de Abimabdera》《Almunia de Abinceron》 ♂ⓂⓃⓅⓆⓇⓈ CDCH, doc.121 (c.1105), 88 (1097-1103.VII.18), 121 (1118?); DMH, doc.2 (1103-1104). ⓂⓃⓄⓅⓆⓇⓈ 《Abin Zevala》なる人物は、ウエスガ近郊のムラヌクウスに家屋・耕地・葡萄畑・オリヴ畑・粉挽水車を所有した。これらの財産はキリスト教徒による征服後、国王ムンロー一世に奉仕したモサラク（イスラム統治下のキリスト教徒）ペドロ・デ・アルメリアに恩賞として賦与され、のちに同人はこれをウエスカ市内のサン・ペドロ・エル・コエホ教会に寄進した。CDCH, doc.64 (1097.IV-V); CDPI, doc.32 (1097.IV-V).
 (78) ウエスカ都市領域内の《almunia de Ibentema》、ウエスカ近郊サブイエスのそばのシエンタモ、フルメン川沿いのフロレンシアなどは一〇九四年のウエスカ攻めに際して国王サンチエ・ラミーレスが命を落としたアルビリスなどがある。DMH, doc.2 (1103-1104); CDCH, doc.67 (1098.III), 73 (1098.IX), 91 (1100-1104); CDPI, doc.34

(1097): DERVE, doc.14 (1093.V.3), 44 (1111), 135 (1126.XII).

(81) たゞえば、ウエスカからはるか西方の砂礫に覆われたラ・ソトネラに所在するアルボレには、ソト川からの引水利用を目的としてムスリムが建設した堰 (zud) がみられる。CDCH, doc.77 (1100.VIII).

(82) とくにアルコラスのアルムニアは、サラセンの国王が所有した (sarracenorum reges ibi habuerunt) ものと明記されている。CDCH, doc.67 (1098.III). 他方、シエタモのアルムニアにはモサラベ教会と粉挽水車が所在したが、イスラーム統治下でウエスカの富裕ユダヤ人 Zavaxorda なる人物の所有するところとなっていた。この人物はイヴリエスの大土地所有者でもあった。国王ペドロ一世はユダヤ人による教会領有を問題視し、これを接収。一〇九八年にウエスカ司教座に寄進している。同司教はさらに、ペドロ・デ・アルメリアに終身保有を条件としてこれを賦与したが、このときには、モサラベ修道院とサン・ペドロ教会、粉挽水車が所在した。CDCH, doc.73 (1098.IX), 91 (1100-1104), 146 (1137).

(83) フォルニエリョという名のアルムニアは、国王ペドロ一世の「乳兄弟」ペドロ・サンチェスの名前をともなつてあらわれる。このほかに、ガルシア・フォルトウニョーネス・デ・フルガセのもの、アト・アスナレスのものが挙げられる。また興味深いところでは《almunia de Ibentenia》はかつて国王サンチョ・ニル・メンスにゆづつ分割され、その二分の一をガルシア・ペジネスが終身で保有し、《almunia de Garcia Pepinez》と呼ばれている。のちに同人の子が甥であるバルバト・エルタにゆづつサン・ペドロ・エル・ビエホ教会に寄進された。DMH, doc.2 (1103-1104); DERVE, doc.135 (1126.XII).

(84) CDCH, doc.92 (1101-1104).

(85) サニエーナ近傍のマルマニエロにゆづつ、CDPI, doc.79 (1101): 《tota illa almunia de illa regina que est iuxta de Saragena cum illa turre que ibidem est et cum toto suo termino.. cum herbis et aquis et pascuis, silvis et garricis》。モンメサの#の#にゆづつ、CDPI, doc.99 (1101): 《medietatem de illa almunia de Montnusa, cum medietate de illa turre, et cum medietate de illo suo termino heremo et populato, cum erbis et aquis》。

(86) 実際にバルディーナとアルムニアが同一のものを指しているケースがある。一〇一七年、アルフォンソ一世は当時の王国最有力貴族ロベ・ガレセス・ペレグリーノに、エヘア近郊の《pardina de Antesia》を賦与した。それから三〇年後の一〇四七年、同人の親族ペラ・ロメウがこれをデンプル騎士団に寄進したおひき、《almunia de Anniesse》

と表現されている。DERVE, doc.52 (1117.III), 347 (1147). バルディーナについては、拙稿「九・一〇世紀アラゴン地方の農村構造・地域的類型化の試み」、『史学雑誌』第一〇七編第三号、一九九八年、五七頁。

(87) CDCH, doc.77 (1100).

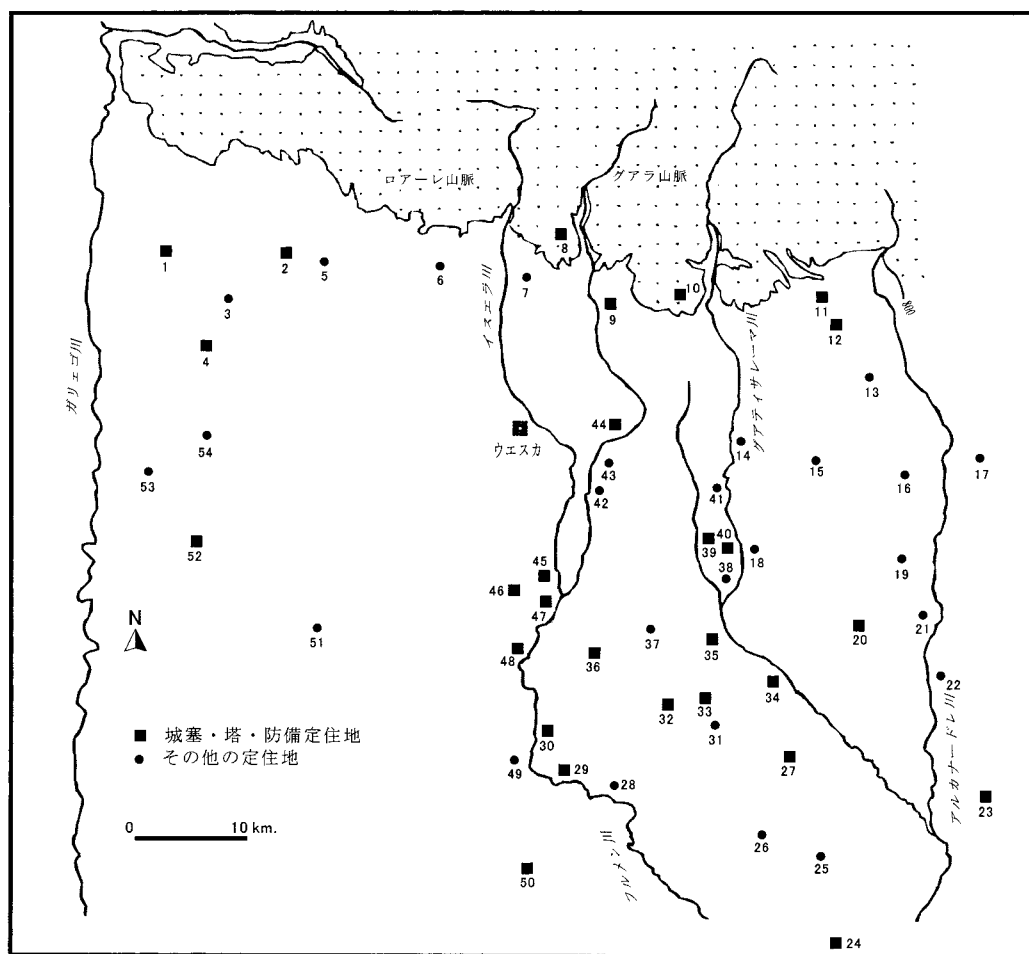
(88) CDCH, doc.90 (1100-1104), 127 (1121): 《Et quia ille dimiserat illa alode et non faciebat illa laborare》。

(89) CDCH, doc.152 (1139): 《illam villam de Alboreg que iacebat deserta simul cum suo castello ut populatis illa bene...》。

(90) CDCH, doc.216 (1154).

(91) 前註(2)。(3)参照。

(92) マルク・ブロック(河野健二・飯沼一郎訳)『フランス農村史の基本性格』創文社、一九九四年、一二頁、三五頁。



地図：ウエスカ地方における城塞と定住地(12世紀初頭)

1:アイエルベ, 2:ボレア, 3:ブラセンシア, 4:アルタソーナ, 5:パイボレア, 6:アラスクエス, 7:サバイエス, 8:セン・イ・メン, 9:チブルコ, 10:サンタ・エウアリア, 11:バンサーノ, 12:ラバータ, 13:シエソ, 14:カステホン, 15:ベリーリヤス, 16:アングエス, 17:アビエゴ, 18:ブエー
 ジョ・デ・ファニャナス, 19:ベスペン, 20:アンティリョン, 21:リサーナ, 22:ペルトウーサ, 23:
 ペラルタ・デ・アルコフエア, 24:サリニエーナ, 25:アルベルエラ・デ・トゥボ, 26:マルセン, 27:
 ウゾン, 28:グラニエン, 29:アルムニエンテ, 30:バルブエス, 31:トラマセー, 32:カリエン, 33:
 ビラセス, 34:セサ, 35:ノバレス, 36:アルペロ・パボ, 37:アルペロ・アルト, 38:アルガビエソ,
 39:アルカラ, 40:ファニャナス, 41:シエタモ, 42:ペリエスタル, 43:ティエルス, 44:モンテアラ
 ゴン, 45:タベルナス, 46:ピシエン, 47:ブニャレス, 48:サンガレン, 49:トーレス・デ・バルブエス,
 50:ロブレス, 51:アルムデバル, 52:トルモス, 53:モンメサ, 54:アルボレ